

歴史を語る建物たち

庄内編
(第7回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

木村屋本店（鶴岡市）



鶴岡市の山王商店街にある菓子屋・木村屋本店の建物は、大正末期の建築とされ、白亜の殿堂を思わせる威風堂々たる趣がある。木村屋は明治20年、山形県で初めてのパン屋として開業した。

ところで、「木村屋」「パン」と言えば、東京の銀座木村屋を思い浮かべる人が多いのではなかろうか。大方の予想通り、鶴岡木村屋は、銀座木村屋から「のれん分け」された企業である。

皇室に認められた「あんぱん」

明治8年4月4日。その日は銀座木村屋にとって極めて重要な日であった。主力商品のあんぱんを明治天皇・皇后陛下に献上したのである。もちろん、両陛下にとってもあんぱんは初めての食べ物。緊張した空気が張り詰める中、あんぱんを口にされた両陛下はその味を称賛し、「引き続き納めるように」と言葉を発せられた。あんぱんが日の目を見た瞬間である。以後、銀座木村屋は全国展開を図っていく。そのあたりの詳細は大山真人著『銀座木村屋あんぱん物語』（平凡社新書）に詳しい。

話を戻すと、鶴岡木村屋（以下、木村屋）の初代は吉野民吉である。埼玉県出身の民吉は、銀座木村屋で修行する身分であったが、その技能の高さは銀座木村屋が創業して以来最高と言われ、特別に木村家以外からののれん分けを許された。そこで民吉が目をつけた



昭和15年頃の木村屋。ビスケット、あめ、ケーキなども販売し、特に「スイートポテト」が人気だったようだ。
出典：「写真アルバム 鶴岡・田川の昭和」（いき出版）

のが、当時日本で最も人口が多かった新潟県であった。内務省『日本帝国国籍戸口表』によると、明治20年の同県の人口は165万人で、東京府（当時の呼び名）の151万人より多かったのである。また、新潟県は日本有数の米どころで、パン作りに必要な酵母を得やすかったこともある。

新天地・鶴岡で奮闘

それがなぜ新潟ではなく、鶴岡になったのか。4代目の現社長・吉野隆一氏は、「(新潟からあまり離れていない)鶴岡に軍隊の駐屯地ができると(民吉が)聞いたから」と、その理由を説明する。軍隊にあんぱんを大量に納入できれば営業面でも効果的だし、そこから販路が広がる期待もあった。

しかし、結局軍隊は来ることなく、かといって、すぐに店コストを回収するのも難しかったので、民吉は鶴岡で商売を続ける決心をした。家族や従業員が、出来上がったあんぱんなどを背負って一軒一軒営業に回り、民吉は店に残って新商品の開発にいそしんだ。オープンも自分で作り、ケーキ作りも独学で習得した。隆一氏は「店が軌道に乗るまで相当苦労したのではないかと推測するが、そのかいあって、木村屋は次第に大きくなり、昭和13年の「鶴岡商工人名録」では、「菓子、パン、餅」部門で営業収益3位となった。

なお、現在の本店の場所に店舗が移転したのは大正9年であり、大正末期には今も残る店舗に建て替えた。隆一氏によると、民吉には自学で大工の心得もあり、建物の建築に当たっては、細部を自ら指示することで、コストを安く抑えたそうだ。

民吉が昭和4年に没し、吉野栄三郎が2代目として跡を継いだ。栄三郎もまた、初代と同様器用で多才であった。戦況が深刻化するにつれて原料の配給が欠乏し、パン、菓子作りが困難になると、栄三郎は見よう見まねで飛行機の部品を作ったりもした。

戦後、多くのパン屋、菓子屋が営業を再開する中、栄三郎は、ラジオやスピーカーの修理などを得意とする光音社という電気屋を営んでおり、いろいろ悩んだ末に、本業を再開したのは同業でも最後の方だった、というエピソードも残る。

「古鏡」で原点回帰

羽黒山神社の近くに、通称「鏡ヶ池」と呼ばれる小さな池がある。大正から昭和にかけて、平安時代から江戸時代に池中納鏡された数百もの鏡が出土し、中には国の重要文化財になっているものも多い。

栄三郎と3代目・吉野勲は、この池中納鏡の言い伝えに着想を得て、後に木村屋の主力商品となる菓子「古鏡」を開発した。昭和30年代前半のことである。また、明治大学を卒業し、先進性に長けた勲は早くよりマーケティングの重要性を認識しており、家庭用テレ

ビが普及し始めたのに合わせて商品のコマースを流すなど、マスメディアを最大限に活用して売り上げを伸ばすことに成功した。

一方で、隆一氏は主力商品「古鏡」の今日的な価値を、「鶴岡（庄内）の文化を、お菓子を通じて伝える」ことにも見いだしている。そして、「今まで流行に乗って、いろいろな商品を開発しては失敗してきた。そこで気づいたことは、当社は地方の菓子屋であり、最新の技術を駆使しながらも、商品の中に地元の伝統文化を包んで発信していく必要があるということだった」と力説する。

その意味で、「古鏡」は木村屋が原点回帰するきっかけになった商品とも言えよう。

古い建物のままでなければならない

隆一氏は、本店の歴史的建物としての価値も、原点回帰の延長上にあると言う。「一時、商売が忙し過ぎて、建て替える機会を逸してしまった」と笑うが、「古い建物だからこそ、“明治時代に鶴岡であんぱんが食べられた”という誇るべき鶴岡の食文化を、市民や観光客にアピールすることができる。これからも残していきたい」と熱く語る姿には、頼もしさを感じられた。

話は、深刻化する若者の流出にも及ぶ。「子どものころから愛情をもって鶴岡の良い所を伝えていかないと、地域へのアイデンティティが醸成されず、結果、地域に若者が残らない。報道されたように、鶴岡の食文化はユネスコにも認められた。また、鶴岡は山形県のみならず、東北地方でもパン食の歴史が古い。そうしたことも、子どもたちが鶴岡に誇りを持つきっかけになればいい」と隆一氏。そして、「自分には先代までのような技量はないが、幸いにして恵まれた人とのつながりを大切にしながら“伝え役”の一翼を担いたい」と謙遜ながらに語ってくれた。

そんな隆一氏の心意気を、90余年の歴史を持つ建物が、いつまでも温かく見守っていることだろう。

(東北公益文科大学特任講師・山口泰史)



鶴岡市の郊外に2012年にオープンしたファクトリーストア。店内からは商品の製造過程を見ることができる。取材のため、特別に撮影許可をいただいた（筆者撮影）。